

佐高信
経済評論家

先日『朝日新聞』が大々的に竹中平蔵のインタビューを載せていて驚いた。『竹中平蔵こそ証人喚問を』（七つ森書館）と主張している私としては見逃すことができない。

とくに経済面に於いて『朝日』は『日経』や『産経』と変わらない新自由主義路線である。それが日本をダメにしたことはハッキリしているのに、『朝日』にはまったくその自覚がないらしい。私は『小泉純一郎と竹中平蔵の罪』（毎日新聞社）という時評集も出したが、『朝日』の罪も加えなければならぬ。

私は『週刊金曜日』の二〇〇九年一月三〇

小泉・竹中「改革」が生んだ社会問題に類被り 無自覚に新自由主義に与する朝日新聞経済部

日号で『朝日新聞』経済部の皮相」を問題にした。思想ならぬ皮相である。

当時、宮内義彦率いるオリックス・グループの不動産屋が「かんぽの宿」を一括購入しようとしていたことに関してだった。

以下、要旨を引用する。

〈民営化ならぬ会社化、規制緩和ならぬ安全緩和を「改革」と称して、小泉純一郎や竹中平蔵と共にその旗を振ってきた宮内が、その果実を手に入れるのはあまりにあさしといと私は思うが、それに「待った」をかけた総務大臣の鳩山邦夫に対して、『朝日』は

二〇〇九年一月八日付の社説で「筋通らぬ総務相の横やり」と異議を唱えた。多分、経済部出身の論説委員が書いたものだろう。「過去の経歴や言動を後になってあげつらうのは、政府に協力する民間人はいなくなってしまう」と言いつが、この言い方は翌一九日付の『産経新聞』に竹中が書いた「いったん政策が決められたとして、それに関係する経済活動がその後できないとなると、民間人はだれも政府の委員会メンバーになどならなくなる」と酷似する。九日付の『日本経済新聞』の社説にも同じような表現があったが、これは「政

バラは読者を惑わすだけである〉

宮内の醜態さを小説という形で描いたのが高杉良の『虚像』（新潮社）であり、竹中の弟分として、遂には獄に落ちた日本振興銀行の木村剛の軌跡をドラマ化したのが、やはり高杉の『破戒者たち』（講談社）である。

『朝日』に盲目的信仰を抱く読者と、『朝日』の経済部の記者はこれらを熟読して、竹中平蔵の罪を頭に叩き込むべきだろう。

経済部に比して、政治部はまだまともである。二〇一二年六月五日付のオピニオン欄の田中秀征（元首相特別補佐）インタビューは秀逸だった。

「約束破る首相に世論は失望」という見出しで、野田のやり方は「自民党は民主党より正しかった」と言っているようなものだ、と批判する。

「総選挙で民主党に投票した人は、身の置き所がないだろう」と続けているが、巧みな表現である。

「消費増税について、野田さんは代表選で約束したというが、これは党内の約束であって、国民との約束ではないことが分かっている。財務省は野田さんの決断で自民党も取り入れて、増税がうまくいくと思っているのだろうが、大震災後、いっそ懸命になった世論を甘くみることはできない」

これもその通りだろう。保守の政治家で財務省に「ソントロール」されなかったのは田中秀征と野中広務べらういと私は指摘してきたが、それを裏つける野田内閣論である。